

多様・多層的な知へ挑戦する 新しい学びの場の創造

「ナレッジキャピタル大学校」体験報告

2日間限りの開催、講義総数なんと112コマ！
そんな「学びの祭典」が4月18〜19日に大阪で開かれた。
その名も「ナレッジキャピタル大学校」。
「学校や社会の枠組みを超えた新しい学びの場」づくりを目的として行われたこの大学校には、「ルネッセ」に関わる人々も多く講師として登場。
これまでにないスタイルで行われた学びのイベントをレポートする。

「ナレッジキャピタル大学校」の仕事掛け人は、異業種の人々が自由に交流しながら知的創造を行える場として2013年にグランフロント大阪の中核施設として誕生した、「ナレッジキャピタル」。その活動については本誌113号でも紹介しているが、今年で5周年を迎え、大阪発民間運営による知的創造拠点として定着した感がある。

5年の間に、中核となる「ナレッジサロン」をはじめ「ナレッジイノベーションアワード」など多彩な活動を通じた知の集積は、ナレッジキャピタルの輪郭を厚く、豊かにしてきた。そうした知の財産を生かし、2日間限りのトライアルイベントとして行われたのが「ナレッジキャピタル大学校」だ。

「ナレッジキャピタル」だ。トライアルと聞くとは、小規模な試みというイメージを抱くかもしれないが、蓋を開けてみれば大がかりな「学びの場」がつけられていた。

知の集積が可能にした、真の学び

大学校のメインテーマは「真の学びは「イメージネー」」。イメージネーは、フランス語の「想像する」を意味する言葉 (imaginer) からの造語だ。中心となるのは1コマ20〜30人を定員とした100コマ超の無料講義。プログラムは「イノベーション」「科学技術」「メディア・エンターテインメント」「ベンチャー」「宇宙」「文化・歴史」「ライフスタイル」。

「大阪・関西」の8分野にわたる「知性とは何か——AI時代に空海の意義を考える」「セミは、ナッツ味!?——昆虫食の魅力とは」といった、好奇心をくすぐる講義タイトルが並ぶ。技術も歴史も音楽もアートも食もAIも宇宙も生物も……。知のごった煮のようなプログラムは、「面白そう！ 何が起ころのだろう？」という期待感を煽る。

講師は大学教授、起業家、美術館長、子育て研究者、宇宙科学者、料理家、ジャーナリスト、発明家といった多彩な「専門家」がとどめるが、いずれもこれまでナレッジキャピタルの活動に関わった人々だ。100コマ超の講義を担う人材が揃っているところにも、5年にわた

る分野の枠を超えた幅広い「知の集積」を見ることが出来る。
「OMOSIROI」をコアバリューとするナレッジキャピタルらしい、想像力をかきたてる大学校は、受講受付開始と同時に、大半の講義が満席となったという。

刺激的な「学び」の格闘競技

会場は、グランフロント大阪地下のコングレコンベンションセンター。広いフロア内に足を踏み入れると、出迎えたのは高さ7m、青と赤の宇宙鳳凰Phoeco (フェッコ)。
CGアーティスト河口洋一郎氏作による極彩色の巨大鳳凰は、このイベントのシンボリック存在だ。天井に



上/三方に壁のないオープンな教室「寺子屋みたいな教室」で、池永寛明所長による講義に熱心に聞き入る受講者。
下/会場内でも圧倒的な存在感を放つ宇宙鳳凰Phoeco (フェッコ)

届かんばかりの鳳凰に圧倒されながら前を見ると、いくつものビルケースを積み上げた上に、板を載せた大きな長方形のテーブルをつけたスペースが目にとまった。立て看板には「立ち飲み屋っぽい教室」と書かれていて。その名前の通り、椅子がなく、壁や仕切りもない。まさに立ち飲み屋のように、ふらっと立ち寄りそうな雰囲気のある教室である。

隣には、「寺子屋みたいな教室」と名付けられた別の教室があった。正面の壁に「わいがや塾」の額が掛かり、床を畳敷きとしている。ここも正面以外は壁がない。さながらテ

レビドラマのオープンセットのようだ。聞けば、今回の「教室」はいずれも「すべての壁を取り払う」をコンセプトにつくられたという。壁のない教室内に靴を脱いであがり、長机を前に座って講義を受けるところは、まさに寺子屋の風情。ここが「ルネッセ」講師陣による講義の場となる。扁額に書かれた「わいがや塾」は、ナレッジサロン内の異業種交流塾「ワイガヤ塾」からとっており、先に掲げた8分野のうち「大阪・関西」部門の講義はこのワイガヤ塾の監修である。

ほかにも、講師の足元にLEDパネルがある「宇宙船か!?教室」など、形態も名称も一筋縄ではいかない「教室」が計10カ所。2日間に各教室で10コマ、計100コマの講義が広いワンフロアの会場で行われる。どの教室も、定員で中に入れずとも外からの立ち見は自由というスタイルである。

初日、評論家の寺島実郎氏による基調講演で開校の後、いよいよ100コマを超える講義が開始した。「寺子屋みたいな教室」での1時間目は、ワイガヤ塾塾長でもある大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所池永寛明所長による「『天下の台所』大坂から大阪の成功と失敗の本質はなにか——『大阪を問いなおす』(前編)」。

懐かしいチャイム音が鳴ると同時に、10の教室から一斉にマイクを持った講師の声が流れた。壁がないという事は、各教室から出る音がダイレクトに響くということである。その音量は喧騒と言ってもいいほどで、まるで講義という名の格闘競技が始まったようだ。ところが、そんなふうには周囲の音にたがわなかったのは数分のもので、やがて自身の意識が「講義を聴く」方向へと切り替わっていく。同時に行われている10コマの講義の空気が伝わることに刺激となり、受け身で「講義を聴く」姿勢から能動的に学ぼうとする意識に切り替わるのだ。これは受講者側のことだけでなく、講師側も同じではないだろうか。次第に池永所長の話し方にも熱がこもっていったように感じられ、静かとは言えない状況のなか、講師・受講者双方が意識的に集中することで学びの空間がつくりあげられていくような一体感が、そこにはあった。

そこからは講義時間5分はあっという間だった。聞き終わった後、スポーツを終えたような爽快感があった。1コマ5分という時間配分は講師としては話し足りない、聴く側ももう少し深く聴きたい……というところだが、それが「もっと学びたい」意欲に自然とつながる。今回想われた100コマ超の講義は、新

たな学びを自ら見つけ出すためのイントロダクションの役割も果たしたのではないだろうか。

「ルネッセ」塾が伝えるもの① 過去から未来へ

「寺子屋みたいな教室」を中心に行われた「ルネッセ」講師陣による講義の内容は、大きく「①大阪・近畿の昔から今日、明日」と「②歴史と技術」というカテゴリーに分けられ

る。①に分類される池永所長の講義は、天下の台所といわれた大坂、「大坂」と言われた時代を経て、現代の大坂は地盤沈下しているとい

われるが、それを言っているのは実は大阪人であるという提起に始まった。さまざまな例をあげながら、日本的な「文化」や「学びたいから学ぶ」という知的欲求が高い風土は今に残っていると、先人は今の我々に「自らを学びなはれ」「多くと交わり、自らを見つけないはれ」「大い

なるワンパターンに、小さな革新を加えなはれ」と語りかけている、とまとめた。

池永所長の講義の受講者はスーツに身を包んだサラリーマン風の男性が多く見られた。受講者は教室によってさまざまだが、学生からシルバードまで老若男女幅広く参加しており、平日午後の開催ながら、サラリーマンと思われる層も多く見られた。ビジネスの中心地でもあるグランフロント大阪が会場であるとい

う立地も幸いしたのかもしれない。

同じく①にあたる講義としては、谷直樹大阪くらしの今昔館館長による「大坂城と船場が輝いていた時代」と現代を問う、加藤政洋立命館大学教授による「《キタ》と《ミナミ》を文化の地理学から問う」、橋爪節也大阪大学総合学術博物館教授の「大坂と大阪万博があったころの大坂の空気」、そして日本料理かこみ店主梶山一希氏「天下の台所大坂をつくった大坂料理と出汁文

化」から現代の食を問う」等があげられる。

谷氏は、大阪の人が大坂城をどう考えているかを起点に、江戸期の大工頭・中井家に伝わるふたつの大坂城指図などを読み解きながら、当時の大坂が商業都市であったことにより育まれた教育機能や町内におけるコミュニケーションの成熟について解説し、フィールドワークを通じた都市研究を専門とする加藤氏は、花街研究者加藤藤吉撮影による大阪の写真を象

徴的に掲げながら、「キタ」と「ミナミ」の文化的背景について説明、現在空洞化しているといわれる大阪だが、今も文化の力がある、と話した。

また橋爪氏は、自身の目で見た大阪万博の記憶を土台に、当時の大阪の空気感、現在の評価などについて語りながら大阪万博の特殊性などを解説した。

資料や写真だけでなく、五感を通して受講者に訴えたのが、梶山氏の

「ルネッセ」塾が伝えるもの② 歴史と技術の融合

カテゴリーの「②歴史と技術」にあたるのは、保田充彦氏による「可視化」の歴史と可能性——グラフからバーチャルリアリティまでである。保田氏が代表をつとめる(株)ズームスの理念は「サイエンスとアートを融合して、役立つコンテンツをつくる」こと。その経験から「可視化」



上/大阪万博をどう見るかは、その当時の万博とどう関わってきたかで全く異なると語った橋爪節也氏。
下左、右中/梶山一希氏による「三都出汁比較」は、水もそれぞれの土地から汲んだものを用いるという本格的な「比較」となった。
右下/「大阪が一番美味しい」「香りは京都の方が……」、それぞれの違いを楽しむ受講者。



上/制作年代の異なる大坂城指図を見せながら講義する谷直樹氏。
下/加藤政洋氏の講義では、写真のほか大阪の町を描いた小説や随想などもとりあげながら、キタとミナミの当時の姿を解説した。



上/可視化について、多彩な実例をあげて解説する保田充彦氏。
下/雪丸ロボットを手に、その誕生のエピソード等を説明する北浦武士氏。

について、その歴史や「わかりやすく伝える」意義や手法等を説明し、実際の作例として、自身が手掛けた360度VR（バーチャルリアリティ）動画による河内寺廃寺跡復元を紹介した。これは、今は跡地が公園として整備されている東大阪市の河内寺廃寺の講堂や金堂などを復元した3DCGを、スマートフォン上で見られるようにしたもの。実際の跡地に立ってスマートフォンをかざすと、画面上に復元した建物が現れ、往時の姿を目で見ることが出来る。建物内に入って中を見ることが出来る。VRの本質は「経験を保存し、

伝えること」にあると保田氏は語る。「ルネッセ」が提唱する「過去を掘り起こし、本質を読み込み、現代、未来へつなぐ」その実践のひとつが、先述のカテゴリー①にあたる「過去から掘り起こしてつなぐ」方法だとすれば、保田氏の講義は、「現代技術をもって歴史を現代に融合させ、つなぐ」ということだろうか。同様の例としてあげられるのが、「歴史から未来へ——聖徳太子の愛犬・雪丸と歩む」だ。この講義は周りを本で囲んだ「図書のある教室」で行われた。講師は、平井康之奈良県王寺町町長と、ソフトウェア・WEBアプリケーションの開発を手掛ける

（株）ミッドウェアソフトウェアデザイナーズ代表の北浦武士氏。さらに王寺町にある達磨寺の日野周圭住職も加わった。王寺町には、古刹達磨寺の略記に記録が残る聖徳太子の愛犬をモチーフとしたイメージマスコット「雪丸」があり、もつと多くの人にその存在を知ってもらいたいという平井町長の依頼を受け誕生したのが、雪丸ロボット（ナレッジキャピタル主催「ナレッジイノベーションアワード」受賞）と、雪丸ロボットを使った、子どもたちだけで運用できる図書館システムである。雪丸が人語を解し経緯を読んだというエピソードから、AIを搭載したコミュニケーションロボットとして開発された雪丸は、話しかけに対してかわいいう声で「またきてくれてありがとう」などと言葉を返してくれる。王寺町では、雪丸ロボットを図書館窓口を導入以降、子どもが図書貸出率が上がるなど成果が上がっているそうだが、それは「雪丸」の姿によるところが大きいと北浦氏は語る。「まず、単純に見た目が可愛らしい。しかもそれが、聖徳太子の愛犬という歴史的な意味合いもあり、インパクトがありま

す」という言葉通り、地元王寺町で親しまれた「雪丸」のもつ由緒正しさと、先端技術がかみ合った好例である。もうひとつ、会場前に誰もが一度は足を止める大きな「箱」があった。脇に大きく「ナレッジキャピタル発想の源流」と書かれており、正面に穴がいくつか空けられている。穴を覗くと、何やら人の映像が動き、喋っている。その声は「木村兼葎堂と申します」……。江戸期の文人木

大阪の「学び」の源流

村兼葎堂が自己紹介をし、その隣の穴からは同時代の学問所懐徳堂の解説が流れる。古くからあるしかけ絵本とデジタル技術を組み合わせ、3D体験ができる「のぞきからくり」を使った、「ルネッセ」でもおなじみともいえる、木村兼葎堂や懐徳堂の紹介である。なぜ、それが「ナレッジキャピタル発想の源流」となるのだろうか。

「このナレッジキャピタル大学校を

開催するにあたり、まずはナレッジキャピタルがどんなことをしているかを知ってもらうためのコンテンツとして、のぞきからくりを企画しました」と話すのは、大学校全体のアートディレクションをつとめた、（株）スーパーフェスティバルの山本粧子氏だ。ナレッジキャピタル始動の際に、「懐徳堂から発想を得た」と趣旨を説明していたことから懐徳堂を、さらに池永所長を通して知った

多様かつ多層的な挑戦が感じられたナレッジキャピタル大学校。トライアルゆえに課題も生まれたことと思われるが、それも含め、この「新しい学びの場」が今後どう進化し続いていくか……。学び、刺激を受け、互いに触発されることで、時代を動かす新しい知が生み出されてきた。自由に交流し、知的創造を行える、このような学びの場から次に何が生まれるか、楽しみである。



上・中/保田充彦氏によるVRを活用した試みの体験ブース。絵本とVRを組み合わせた次世代型飛び出す絵本とバーチャルドローン体験。
下/「のぞきからくり」の企画者山本粧子氏。「人間は想像できるから面白い」という発想からメインテーマ「真の学びは“イマジネ!”」を提案。「勉強、教育はもっとハッピーでないと」と、テーマカラーを華やかなピンク色にしたのも山本氏である。